

子どもと共に創る道徳授業を目指して

～子どもの心にせまる発問～

和井内 良樹（東京学芸大学附属小金井小学校）

1 私の問題意識

(1) 子どもと共に創る道徳授業を目指して

子どもと共に創る道徳授業とは、子どもが主体となって道徳学習が進行する授業と考えます。子どもが自由にテーマを決めて進行する授業スタイルが「子ども主体」ではなく、教師が子どもなりの思いや願いを受け止め、子どものものの見方・考え方にそった発問、つまり子どもの心にせまる発問を構成し授業をコーディネートしていくというのが基本的なコンセプトです。

そもそも子どもと教師とで学習活動を共に作り上げていく協働作業が道徳授業であるといえます。道徳の時間は道徳的価値の自覚を深める学習の時間であり、子どもと子ども、教師と子どもがいきいきとかかわることを通して、相互の学び合いが成立し、「共に創る」状況が生まれると考えます。教師自らも子どもと共に学び合うという意識を持つことが大切だと思います。

道徳授業は、ある一定の道徳的価値を身につけさせるものではなく、ねらいとする価値について40人の子どもがいたら40通りの考えを保障する時間でもあります。教師の発問に即して話し合い活動が展開しますが、様々なタイプの考えが混沌とする状況が望ましいと考えます。その中で自分にぴったりの考えもあれば、ぜんぜん違う考えもあるでしょう。また、自分とは違うけれども納得させられる考えもあるでしょう。自分の考えを他と比較して吟味し合うことを通して、より確かなものに磨き上げていくと考えられます。

自分の考えの根拠となっているものは自身の体験であり、子どもは考えながら自分を振り返り見つめるといえます。道徳的価値への気づき → 話し合い活動を通しての道徳的価値の理解（比較・吟味）、自己の振り返りまでが一連の道徳授業の流れです。さらに、道徳的価値の自覚とは、比較・吟味を通していくつかの考えの中から自分はこうだと決定することであるとと言えます。自分を振り返り見つめる一環としても考えられますが、ここではより自分に対して課題をもって意識的になる段階としてとらえたいと考えます。

子どもは様々な課題に立ち向かい、ときにはつまずきながら自分を見つめ、自分のあり方を探っていきます。つまずくことはその解決に向け新たな視点を獲得することにつながっていきます。子どもは過去の体験を振り返りながら、その中の自分と現在の自分とを比較していきます。そして、新たな視点の獲得によって、体験にも新たな意味を見いだしていくのです。結果として、子どもは自分を見る目を豊かにしていくと同時に、体験を道徳的に意味あるものに変えていくと考えられます。つまり自分の体験を価値づける力を豊かにしていくことになると考えられます。

子どもどうしが自分の体験を語り合い、ときとして道徳的体験として共有し合う際に、子どもの論理は道徳的価値を核として相互につながり、「ああそうなんだ」という子ども相互による価値の共有化が達成されるのです。

このような道徳授業を通して、子ども一人一人に、自分の生き方やあり方を自律的にとらえさせながら、共によりよくなる意欲や態度を育てることができると考えます。

(2) 子どもの心にせまる発問を！

道徳授業に限りませんが、子どもの興味・関心に基づいた発問と理解されがちですが、授業のねらいから逸脱しては意味がありません。子どもの興味・関心に基づき、しかもねらいとする道徳的価値から外れない発問、つまり道徳授業として軸がぶれない発問ということになります。

しかし、道徳授業としての軸を意識するあまり、子どもからの反応が今ひとつ・・・という状況も多くみられます。指導案での基本発問を板書カードとともに順番に繰り出していく道徳授業に陥ってはいませんか？

2 私 の 提 案 ◇ 子どもの心にせまる発問のために ◇

資料は子どもが道徳授業のねらいにそくして話し合うための共通の土台であり、話し合いが道徳的価値に向かって成り立っていくかどうかを大きく左右するのが発問です。

【その1】 子どものこだわりを生かす発問

資料に対して子どもは、多様な感じ方・疑問などをもちます。教師はそれらを予想し、或いは受け止めながら発問を投げかけることが大事だと考えます。場面を追って順に気持ちを問うだけでは、子どもは漠然と反応するばかりで「本音」は出てきません。子どもが話し合ってみたくなるような「心の引っかかり」を見逃さず、発問を組み立てます。

【その2】 多様な考えを導く発問

道徳の授業は思ったことを自由に発言できる場です。特にねらいに直接結びつく中心発問では、価値についての多様な考えを導くよう心がけます。ここでは、「どうしてなのか」と理由や原因を問う、「どうすべきか・何が大事か」と理解や決意を求める発問は子どもの考えを狭める可能性が大きいです。まず始めの発問は、主人公に身を置いて共感性を高めたり、自分にもこんなことがあったなど体験を交えながら考えさせる発問が望ましいと考えます。

【その3】 子どもの考えの根拠を確かめる発問

子どもの反応を十分受け止めた後に、「なぜそう考えたのか」「(いくつかの考えを整理して)どれが大事だと思うか」など、根拠を問う切り返しの発問を行うことが有効であると考えます。

「主人公の〇〇はこのときどんな気持ちだったか」など、心情を問うだけでは道徳的価値には迫りません。「ぼくは一番□□を大事にしたいから」など、子どもの考えの根拠、つまり道徳的価値にかかわる部分をクローズアップさせます。

【その4】 無理に引っ張らない！

生活上の問題と結びつけて、子どもに反省や決意表明を求めたりすることは本来道徳の授業の趣旨ではないと考えます。道徳的価値への自覚を促すためには、子どもを信頼し反応をじっくり受け止める姿勢が基本であると思います。道徳授業によって子どもの道徳性を引き上げるのではなく、「心を耕す」イメージをもちたいと考えています。

【その5】 子どもの体験を生かす工夫を通して

子どもが自分自身を振り返るとは、具体的には過去の体験を思い起こし、ねらいとする価値と結びつけ自分なりに意味づけすることです。事前に子どもの体験を調査して座席表指導メモなどにまとめ、授業で、例えば「縄跳びの練習を一生けん命している〇〇くんは、二重跳びができたときどんな気持ちだった？」と意図的指名を行うことで、一人一人の体験を丹念に見取り生かすことができます。また、行事・校外学習などクラスの共通体験を取り上げ、そのときの思いを授業で掘り起こすことも大事だと考えます。

【その6】 多様な話し合いの工夫を通して

教師との一問一答だけでは話し合いにはなりません。小グループ(3～4名)で話し合ったり、対立的な討論形式で話し合ったり、話し合いのさせ方を多様に工夫することも必要です。それに応じて簡単な動作を行う動作化や登場人物の立場になって演じる役割演技などを交えて話し合う方法も考えられます。

第5 学年道徳学習指導案

日時：平成22年2月5日（金）13:30～14:15

対象：5年4組 38名

場所：5年4組教室

授業者：和井内 良樹

1 主題名 友達について

2 資料 「願いのバトン」(遠藤 信幸作) 2-(3) 信頼・友情

3 主題設定の理由

友達と絆を深め、健全な友達関係を育てていくことは、豊かな人生を送る上で大切なことである。相互信頼の下に協力し学び合うことによって互いに切磋琢磨し合うような真の友情を育てたい。友情の基盤にあるものは、思いやりの心であり人間尊重の精神である。互いの人格の尊厳を認め合うことなくしては真の友情はあり得ない。ところで、信頼関係を築いていくためには、第一に相互理解が必要となる。何も知らない相手に対して信頼を寄せることは不可能なことである。相手がどうい人物なのか、自分とのかかわりの中でよく理解してこそ、自分に関する事柄でも任せられるという安心感が生まれ、信頼関係が築かれていくのである。第二に相手に学ぼうとする謙虚な姿勢が必要である。単に趣味や嗜好を同じくする閉鎖的な仲間同士ではなく、相手の個性を総合的に理解しながらも、自分にはない相手のよさを取り入れようと努力することが大切である。これら二つを高学年の児童に理解させることが重要であると考えた。

5年生に「友達とはどんな人か」と尋ねると、「いっしょにいて楽しい人」「いつも遊べる人」「自分と同じことが好きな人」などの他に、「何でも話せる（相談できる）人」「安心できる（裏切らない）人」という反応が概ね返ってくる。この期の5年生は、趣味や嗜好、遊びの楽しさを共有するだけの友達関係から、相互信頼に基づく友達関係を徐々に志向するようになってきている。しかし、「自分が一番友達だと思っている相手から、自分が信頼されていると思うか」と問うと、半数は首をかしげてしまう様子が見られる。このことは、「友達が自分のことをどれだけ理解していると思うか」との問いに、多くの子どもが、まあまあ理解している、あまり理解していないと答えた結果と関係があると思われる。つまり、子どもの実態として、友達関係を築く上で相互理解が十分機能していない（或いは認識されていない）ことが考えられる。

本時の資料「願いのバトン」には、北京オリンピック陸上男子400mリレーでの日本人選手たちの活躍が描かれている。選手たちはアンカーの朝原選手を中心に、成功が難しいアンダーバスの練習に取り組み何度も失敗を重ねながらも、レース決勝ではオリンピック銅メダル獲得という快挙を成し遂げた。本時では、朝原選手を中心に、練習中何度もバトンパス失敗を繰り返したときや、レース本番にメンバーからのバトンを待つときの心情などを考えさせることを通して、メンバー相互の信頼関係の絆の強さ、仲間を信じて直向きに努力する心の素晴らしさに迫りたい。特に、中心発問では、メンバーを信頼する朝原選手の心情の根拠について切り返すことにより、信頼感の根底には、ともに厳しい試練を乗り越えてきたメンバーへの理解や切磋琢磨し合ったメンバーへの尊敬の念があることに気づかせたい。これらのことを考え本主題を設定した。

4 学習指導計画（2-(3) 信頼・友情）

指導時期	主題	資料	内容
1学期(4月)	同じクラスの仲間	「オトちゃんルール」は「あたりまえ」のルール(東書) 心のレシーブ(東書)	友達として接する心とは
2学期(11月)	男女の協力		男子女子とが理解し合うためには
3学期(2月)	友達について	願いのバトン(遠藤)	友達どうし信頼し合うためには

5 本時の学習指導

(1) ねらい

互いを理解し信頼し合う大切さを認め、学び合って友情をより一層深めようとする心情を育てる。

(2) 展開

主な学習活動・予想される児童の反応	○留意点 ※評価
<p>1. 友達とはどのような存在なのか話し合う。</p> <p>①あなたが友達に対して期待することはどんなことだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いっしょにいて楽しい（安心できる）こと。 ・何でも話せること。→信頼できること。 	<p>○「あなたにも友達から同じことを期待されているだろうか」と問い、「信頼」というキーワードに着目させながら、本時の課題を提示する。</p>
<p>信頼し合うためにはどんなことが大切だろう。</p>	
<p>2. 資料「願いのバトン」を読んで話し合う。</p> <p>①アンダーバスの練習がうまくいかず、失敗を繰り返したとき、朝原選手はどんなことを考えただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・練習してもこのメンバーでは無理なのか。 ・リーダーの自分が諦めてはだめだ。 ・「メダル獲得」のために絶対成功させるぞ。 <p>② <u>400m リレー決勝がスタートし、高平選手からのバトンパスを待っているとき、朝原選手は心の奥でどんなことを思っただろう。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・バトンを落としたらどうしよう。 ・自分までバトンがつながるか不安だな。 ・バトンを必ずうけとるぞ。 ・ぼくは高平を（みんなを）信じる。きっとバトンを渡してくれる。 <p>③高平選手からバトンを受け取った瞬間、朝原選手はどんな気持ちだっただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを目指して走るだけだ！ ・みんなの期待に応えるぞ！ ・自分はみんなから信頼されているんだ。 	<p>○リーダーとしての重圧やメンバーへの不安など、人間的な心の弱さを仲間との相互理解や練習量によって乗り越えようとする朝原選手の心情に共感させるようにする。</p> <p>○メンバーや自分への不安や迷いにも触れながら、メンバーを信頼する朝原選手の心情について考えさせるようにする。</p> <p>※「朝原選手はどのようにしてこれほどまでメンバーを信頼することができるのだろう」と切り返した際に、信頼の根底にある相互理解、尊敬の念に迫ることができたか。</p> <p>○「朝原さんに絶対に渡す！」というメンバーの強い思いについても触れ、自分を信頼するメンバーのためにも期待に応えようとする朝原選手の心情に共感するようにする。</p>
<p>3. 友情について自分を振り返り考える。</p> <p>①信頼し合うためにはどんなことが大切だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな人なのか（どんな考えなのか）理解し合うこと。 ・頑張っていることを認め合うこと。 	<p>○ワークシートに書かせ発表し合うようにする。実際の友達を想定させながら考えさせるようにする。</p> <p>※発問②反応の根拠を参考にしながら、自分なりに考えることができたか。</p>
<p>4. 実際の映像を視聴し、まとめる。</p> <p>①「願いのバトン」を観てみよう。どんなことを感じただろう。</p>	<p>○400m リレー決勝の様子をビデオで視聴させ、信頼し合う素晴らしさをクラス全体で共有するようにしたい。</p>

黒 板

テーマ：「友達に期待すること」

A1	<u>B20</u>	A2
仲良く遊べる仲にした い		一緒にいて くれる

<u>B26</u>	A7	<u>B27</u>
お互い助け合っ て生活したい	悩んだとき 一緒に考えて くれる	いつも笑わ せて元気づ けてくれる

A13	<u>B33</u>	A14
趣味を認め てくれるこ と	助け合っ て協力して くれる	色々なこと を一緒にし てくれる

<u>B21</u>	A3	<u>B22</u>
一緒にいて くれる	友達からさ そってくれる こと	一緒にいて くれる

A8	<u>B28</u>	A9
もっと自分 の心をわか ってほしい	信じてくれ ることお互 いに気遣う	優しく接し てくれる

<u>B34</u>	A15	<u>B35</u>	A16
困った時に 助けてくれ る	自分が困っ ている時に 助けてくれ る	一緒に行動 して、協力 してくれる	相談にのっ てくれる

A4	<u>B23</u>	A5
いろいろや ってくれる	助け合える 事	自分をかば ってくれる

<u>B29</u>	A10	<u>B30</u>	A11
自分の事を 考えてくれ る	悲しいとき 慰めてくれ る	信頼、友情	遊んでくれ る

<u>B36</u>	A17	<u>B37</u>
仲良くして くれる	仲良くする こと	優しくする こと

<u>B24</u>	<u>B25</u>	A6
私が困って いる時に頼 らしてくれ る	自分が困っ ているとき に助けてく れる	一緒に遊ぶ

<u>B31</u>	A12	<u>B32</u>
ダメな時は ダメと言っ てくれる	慰めてくれ る	ありがとう、ご めんね、がんば ろう、を言っ てくれる

A18	<u>B38</u>	A19
困ったとき に支えてく れる	困ったとき に助けてく れる	約束を必ず 守る

「願いのバトン」授業記録

活動の流れ・教師の発問等	児童の発言
<p>【友だちについてのアンケートの紹介】</p> <p>T：友だちに期待することは・・・相談に乗ってくれるM君。どうして？</p> <p>T：Kさんは、信じてくれること。 友だちがあなたのことをということかな。</p> <p>T：それでは、一番大事な人を思い浮かべて・・・ その人は自分が困っているときに支えてくれるかな。 みんなの中には、首をかしげている人もいますね。</p> <p>T：友だちと信じ合う・まかせられる・・・ 約束を必ず守る・・・って、K君は書いてくれたんだけど・・・</p> <p>T：どうすれば信頼しあえるか。 あるお話を読んでもらいます。</p>	<p>C：友だちとかに心配事とかはなすこと</p> <p>C：お互いに信じ合えればいい</p>  
<p>【「願いのバトン」配布・読む】</p> <p>【アンダーハンドバスの説明】</p> <p>【走者（登場人物）の説明】</p> <p>T：朝原選手は、36才</p> <p>T：アンダーハンドバスは、難しいと判っていて、何度も練習しました。でも、失敗ばかり・・・ 朝原選手は、どんな事を思ったのでしょうか。</p> <p>ということとは？</p>	<p>C：何でうまくいかないんだろうってずっと考えてた</p> <p>反省してる</p>

<p>T：他のメンバーのことなども</p> <p>T：どちらかという、二人とも前向きな気持ちだね</p> <p>T：朝原さんはバトンパスを待っているとき、心の中でどんなことをおもったかな。</p> <p>T：俺は高平を信じる！ってかんじ？</p> <p>T：さっきKさんは、見守るって言ってたけど、心配な感じ？ 大丈夫って感じ？</p> <p>T：自分のせいでうまくいかなかったら・・・っていう心配の気持ち。 でも、どうして朝原選手は心配な気持ちをのりこえて信じることができたのだろうね？</p> <p>T：練習すればするほど、相手の欠点も見えてくるでしょ。 それでも信頼できる？</p> <p>T：特に、サッカーやっている人は？ 同じような経験があるんじゃない？ Hくん？</p>	<p>C：何とかできるって信じてる</p> <p>C：絶対に成功させてメダルをもらいたい</p> <p>C：つけたして、昔から仲が良かったから、他の人たちはダメかと思っけていても、朝原さんはこの4人なら絶対大丈夫って思った</p> <p>C：本番の時は緊張してうまくいかないんじゃないか。 C：アンカーなので、自分のせいで負けたりみんなに迷惑をかけるんじゃないか。 C：最後だから緊張していて、心配で見守っているような感じ。 C：最後になるので高平選手を信頼して全力で走る！</p> <p>C：大丈夫って感じ C：バトンパスが成功していたから、みんながつないでくれたバトンを失敗しても全力で走ろう。</p> <p>C：文章には朝原選手と高平選手は友だちってだから、信頼し合っていて、練習でも成功し合っていたから。 みんな夢に向かってがんばってきた。 C：ずっと4人一丸となってがんばってきたから。 C：私も同じで、ずっと仲のよい友だちだったから、信頼できる絆ができていた。 C：そうなっていたから、信じられた。</p> <p>—ああ・・・</p> <p>C：だれにでも失敗はあるから、みんな全力でがんばってるし、いいじゃん。あきらめていないから。 C：できないって言っている人が必ずしも失敗しない訳じゃないし。 C：その通り。</p>
---	---



T：銅メダルを手にしたときの気持ちは？

【ワークシートの活動】

絆をお互いに深めていくためには・・・

【終末・・・オリンピックのVTR視聴】

C：前向きでがんばっている人の姿を見たら、認めてあげるべき。でないと、失敗するときだけがんに責めても・・・

私は水泳をしているけれど、ある大会のリレーで男子がフライングを2回して失格になってしまっ。でも、その男子はメンバーから外されなかった。私は、何でかなと思って聞いてみたら、周りの人が「だって、あいつががんばってるもん」って言うていたから。

C：今までやってきたことは、効果がある。さらに絆も深くなったのかな。

C：はじめからやってきた努力がみんなのためになった。自分だけがうれしいんじゃなくて、みんなもうれしい。

C：朝原選手が、ゴールしたときに「やったー！」とって一番最初に抱きしめたのは、高平選手だから、高平選手に感謝していたんじゃないかな。

C：信頼し合うためには、支え合うことが大切。

C：相手のことをよく知る。

C：認め合う。

子どもたちも参観の方々も食い入るようにテレビを見つめていました。

(文責：前田 良子)



「願いのバトン」

※北京オリンピック陸上競技男子四〇〇m
リレー決勝で3位の日本チーム。
レース後、四人で日の丸をまわって喜び
リレー選手たち。

「日本速い、速い。結果は・・・なんと、三位。日本銅メダル。日本陸上界にとって、記念すべき銅メダル。四〇〇mリレーにおいて、日本、快きよ達成です。」

二〇〇八年、北京オリンピック大会。日本は四〇〇mリレーで銅メダルをかく得した。日本中がわいたしゅん間だ。

第一走者は塚原選手、第二走者は末次選手、第三走者は高平選手、そして、第四走者は朝原選手。朝原選手は日本の短距離走を引っ張ってきた選手だ。四大会オリンピック出場という記録を持ち、チームのリーダーだ。

プライベートでも仲の良い四人は、今までにいくつものレースで何度もバトンをつないできたのだった。

日本には強豪国に負けない武器があった。それはアンダーハンドパスだ。従来の上からバトンをわたすオーバーハンドパスとちがいで、相手の手の下からバトンをわたすため、素早いバトンパスができる方法だ。しかし、アンダーハンドパスは高度な技術が必要だった。しかも、失敗する可能性が大きいため、他の国では行われていない方法だった。

日本が世界の強豪国と互角に戦うためには、これを成功させることが絶対に必要だ。成功させるかぎは、多くの練習量と、そして何よりもチームワークだった。

朝原選手は、

(このチームでアンダーハンドパスを絶対完成させるぞ。)

という、強い思いを持って練習に臨んだ。

練習を始めたころは、「あ、落としたり!」「うまくわたせない!」と、ミスを連発した。何回練習しても、なかなかうまくバトンをわたすことができなかった。

(自分たちでは無理なのかもしれない。)

と、このとき、塚原選手は感じた。末次選手も高平選手も同じことを感じていた。

しかし、リーダーの朝原選手は、

「なんでうまくいかなかったん?」

と、失敗のたびごとに、熱心に語りかけるのだった。

チームのみんなで話し合う機会が増えていった。それとともに、練習量も確実に増えていった。

そして、ついに初めて全員が成功することができたときには、

「やったー」

と、みんなで抱き合って、子どものように喜んだ。

(朝原さんに絶対後かいはさせたくない。この人になつ得してもらえれば、結果は必ずついてくる。朝原さんにメダルを!)

三人の選手たちは、チームを励まし引っ張ってくれる朝原選手の気持ちに応えたいと思うようになっていった。

練習を重ねるごとに、アンダーハンドパスの成功率は、日に日に高まっていった。

二〇〇八年、北京オリンピック開催。朝原選手にとって最後となるオリンピックだ。決勝進出を目標にして臨んだ。二〇〇m走では、満足な走りができず、朝原選手は準決勝に出場することさえできなかった。

また、三人の選手たちも個人の競技において満足する結果が出せないでいた。末次選手は悔しさと胸が張りさけそうだった。塚原選手においては、太ももを痛めてしまった。それぞれが不安を抱えていた。

そんな中、四〇〇mリレー予選では、なんと起こりえないようなことが起きていた。日本のライバルとなる強豪国が、バトンパスのミスを連発し、失格となったのだ。日本は予選全体三位通過だった。

四〇〇mリレー決勝の直前、朝原選手は必死で重圧にたえようとしていた。

「朝原さん、ぜったいに渡しますから、思い切り出てください。」

高平選手が力強く声をかけた。

第三走者の高平選手と朝原選手は、アテネオリンピックからずっとバトンをつないできた。高平選手との間でバトンがわたらなかつたことは、これまで一度もなかつた。(絶対にわたす、必ずうけとる。)この思いが二人のきずなとなっていた。

各国の第一走者がスタートラインについた。そのとき、塚原選手は高ぶる気持ちをおさえられなかった。

(この一本にかける。足よ、こらえてくれ。絶対にバトンをわたす。)

「バーン！」というピストルの合図とともに、塚原選手は飛び出した。ぐんぐんスピードに乗った。いい走りだった。

第二走者の末次選手へのアンダーハンドパス成功。末次選手はただひたすらに前だけを見てけん命に走った。

自分個人の成績のことなど、もう頭になかった。第三走者の高平選手へのアンダーハンドパス成功。その直後、

第五レーンを走るジャマイカのポルト選手が内側から一気に高平選手

をぬぎ去った。しかし、高平選手の目には映らなかった。彼が見つめて

いたのは、陸上を志して以来、ずっと追い続けてきた人、朝原選手の背

中だけだった。

あらかじめ決めておいたポイントを高平選手が踏もうとするやいな

や、朝原選手は飛び出した。

「ハイ！」

背中に聞こえた高平選手の声に、朝原選手はうしろに引いた左手を大

きく広げた。その手の中にバトンが吸い込まれた。バトンがわたると、

高平選手は無意識に

「行け！」

と、叫んでいた。

朝原選手はゴールしか見ていなかった。すると、ふいに今までに感じ

たことのないような感覚にとらわれた。体が軽く感じられた。そのままゴールへ飛び込んだ。

朝原選手は自分が何位でゴールしたのかわからなかった。すぐに電光掲示板を見上げて祈った。

3 JAPAN

「やったー」

朝原選手はバトンを上を高々と投げ、高平選手を抱きしめた。飛ぶようにかげよってきた塚原選手、末次選手とも抱き合って喜んだ。みんなが泣いていた。

堂々の三位、日本銅メダル。日本のタイムは三八秒一五だった。

栄光のゴールへと朝原選手がつかないだもの、それはみんなの願いのバトンだった。

(遠藤 信幸 の作品による)